

私たちは喜んでいてもあれば、辛い時や悲しい時もあります。自分の目の前で嫌な事や自分の願っていない事が起こることもあります。そんな時、私たちはどういう行動をとっていますか。発明王のエジソンは電球のフィラメントに適した物質を発見するまでに6000回もの実験をしました。6000回もの失敗を繰り返した事は有名な話です。その後成功し、エジソンは取材を受けています。記者になぜ6000回も失敗したのに、実験を続けられたのかと聞かれたエジソンは「フィラメントに適さない物質を6000個も発見できた」と言いました。何が電球に不向きなのかを知る事ができたと言ったのです。6000回の実験が失敗だと思っていませんでした。エジソンはそのように前向きな生き方をした人でした。人間は往々にして失敗したと思ったり、恥をかいたりすると逃避衝動が起こります。これは、私たちの体に分泌されるホルモンと非常に大きな関わりがあります。逃避反応あるいは闘争を促すホルモンに「ノルアドレナリン」という物質があります。これはストレス・ホルモンのうちの1つであり、注意と衝動性が制御されている脳の部分に影響します。それに対して「甲状腺刺激放出ホルモン(TRH)」という物質があります。これはやる気を出させる甲状腺ホルモンやプロラクチン(女性ホルモン、困った人を助けようという感情にしたりする)をうながしますがノルアドレナリン状態(悩むことなど)が続くとこのTRHが出なくなってしまうのです。自分にとって不都合な問題があった時、「逃げたい」「目をそらしたい」という感情が起こったとき、いかにその時にすべき事ができるかで、大きく変わってきます。(使徒16:1～40)ここには問題が起こった時に逃避しようとした人たちと、反対に問題が起きて自分ができるべきことを行った人が出てきます。パウロとシラスは夢を通し、神に導かれてマケドニアの地を訪れました。そこでルデヤの救いがあり、良い結果も得ていました。しかし占いの霊につかれた女奴隷がパウロに対して妨害とも受け取れる行動が幾日も続いたので、占いの霊を追い出しました。その女奴隷から占いの霊を追い出されたことによって女の主人は金儲けの手段を奪われてしまいました。その時、主人は、自己中心な感情的でパウロとシラスを訴えました。そして役人たちも同じようにパウロたちについてちゃんと調べもしないで、むちを打ち、獄舎へ入れました。しかしこのような問題の中にあってもパウロとシラスは獄中で祈りつつ賛美をしていました。そして突然、大地震が起こり、囚人たちをつないでおいた鎖はすべて外されました。本来ならば、逃げてしまうような場面であります。しかし他の囚人たちも含めて誰一人として逃げることはありませんでした。悪い状況にいてもパウロたちがノルアドレナリンで行動しなかったからです。パウロたちは自分たちに神様がいることをよくわかっていました。正しいことをやっとうまいいかなかったとき、あなたならどうしますか。正しいことをやったのに獄中に入れられいつ助けてもらえるかわからない…私たちはたとえそれが自分の蒔いた種であったとしても、ノルアドレナリンで拒否(責任転嫁、受け入れたくない)し、相手を傷つけ、自分だけなんとか助かろうとするのです。兵隊たちが、死のうとしましたが、彼らの行動もまた逃避衝動です。私たちは冷静な状況であればわかりますが、調子が悪い状況になると誤った判断を繰り返してしまうのです。悩み続けるだけではノルアドレナリン状態から脱出することができません。そしてTRH(甲状腺刺激放出ホルモン)が出なくなってしまうのです。このTRHを出すためにはどうしたらよいのでしょうか。興味があり、報酬も期待できる時、当然人はやる気がでます。興味がなく、そして報酬も期待できないものであっても、やり始めると興味が出て、元気が出るのです。感情が落ち込み、やる気にならないときでも、すべきことをすればやる気も出てきて元気になるのです。私たちは本来自分がしなくてはならないことはわかっています。しかしそういう時私たちはすればよいことをせず逃げ方向へいってしまい落ち込みつぱなしになってしまうのです。やる気を出すためには、問題の状況に留まっていはいけません。聖書の原則はいつも「夕があり朝がある」です。聖書に出てくる人たちも、みんな悪いときを乗り越えてよいものを得ました。ロトが目の中の潤った地を選んでソドムとゴモラの地にしてしまったように、私たちにとっても選んだ地がソドムとゴモラになることは怖いことです。欲のまま進み、感謝できず、その考えに妥協していくことが怖いことです。そしてそうさせるのがノルアドレナリンです。問題の中で悩むのはよくありません。失敗したり悪い状況になったりしたとき、私たちは、もう一度、本来すべきことを考えなくてははいけません。悪いときによく前進するためには**①祈りと賛美**。祈りと賛美…感謝のことです。これを失っていると、物事を進めることはできません。パウロとシラスが悪い状況でも人々によい影響を与えられたのはこれをしていたからです。悪いときこそ、悪い状況にいつ、よい状況に自らを変えていく必要があります。祈りと賛美をもって変えていかなくてははいけません。よいときは誰でもよいのです。失敗したときこそ、私たちの真価が問われるのです。悪くなったときこそ、本当に自分もっている信仰に立たないといけません。自分の中の問題は神様にゆだねるのです。地震が起こり、牢があくという奇跡が起きたときも、パウロとシラスは逃げません。そこで救いがおきました。みんなが感情的になりそうなときにあなた一人は感情的にならない努力をしてください。**②知恵を得る**。(ヤコブ1:2～8)知恵は過去のことはではなく、先のことばです。これから起こることについて知恵を持って行動できるのです。問題が起きたときに自分の価値観や、過去の分析をするのではなく、賛美と祈りをもって知恵に生きなくてははいけません。「このことを通して神様は何を語るのか」「どういうことばを求めべきなのか」ソロモンが世の中のすべての王の中で一番富んだ王になった理由はこれです。彼は問題があるときにいつも神様に知恵を求めました。考えるときに私たちのあさはかな考えではなく、知恵を求めなくてははいけません。聖書を読み、神様がそのことを通して何を伝えようとしているのか感じる必要があります。**③失敗を制御する**。(ヤコブ3:2～4)口を制御する人が体全体を制御する人だとかかれています。口を制御するとはどういうことでしょうか。私たちが悪い言葉を発するのは大概悪い状況のときです。悪いときというのはほとんど自分が失敗したときです。失敗したとき「くやしい」「こんなはずじゃなかったのに」と思い、言葉でいろんな悪いことを言ってしまうのですが、「失敗は私に私の一番いけないところを教えにきてくれた大切なお使い」なのです。うまくいかないときは、何か自分が変わるチャンスだと思ってください。悪いときこそ人は変われるのです。「試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」(1コリ10:13)脱出できるのはよい道を歩むからです。神様は私たちにどうすべきなのか教えてくれています。悪い言葉が耳に聞こえてくる時こそ、その声に耳を傾けるのではなく、神様に委ねなくてははいけません。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」(詩37:5)人の力でやろうとすると失敗してしまいます。大きなことをしようと思えば思うほど、大切なものを残そうと思えば思うほど、神様に祈り願っていきましょう。(要約者：平澤一浩)